
「一閑人」奇談

十司 紗奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「一閑人」奇談

【Nコード】

N5524T

【作者名】

十司 紗奈

【あらすじ】

骨董屋「一閑人」を開いた僕のところ、集まる「物」とその「物の思い」と「人の思い」を描く物語です。

伊万里の聲

骨董屋が並ぶこの通りに、僕が喫茶も兼ねた店「一閑人」を路地の奥に開いたのは、半年前のことだ。デザインの仕事を細々としており、その収入で自分一人なら食べていけるので、ほぼ道楽で始めたのだが、客足は遠く、パソコンでのネット販売に重点を置くこととしていた矢先の事だった。

ある昼下がり、店先に人の気配がした。

「どうぞ、お入り下さい」

僕はパソコンの画面に目を向けたまま、声をかけた。古い町屋を改装して作ったこの店は、入口で靴をぬいで入らなければならぬので、初めて来た人には、なかなか入りづらいようだった。

衣の擦れる音と、白檀の香りがして、画面から目を上げた。昼間でも薄暗い店内、オレンジ色の照明の下に立っていたのは、切れ長の目に陶器のような白い肌の、着物姿のすらりとした女性。白地に赤、青、緑の草花が染められ、金糸の刺繍が施された、今時珍しいくらい手の込んだ着物。まるで伊万里を柄にしたかのような。

彼女は他のものには目もくれず、坪庭の近くにある棚に飾られた小皿の前に立った。

「江戸後期の伊万里です。四枚しかないのです、お安くしておきますよ」

「……一枚、見つけて下さい」

ポツリを彼女が呟いた。一瞬、耳を疑ったが、相手は同じ台詞を繰り返した。続けて。

「足元にあります。来月十日、もう一度伺います。それまでに、そろえて下さい」

そう言つと、静かに店を出て行った。白檀の香りだけを残して。

最初はただのひやかしかと思った。が、どうにも気になる。足元なんて言ったので、念のため店内の棚の足下の引き戸を全て開けて

探してみたが、見つからない。当然なのだか。

もはや、と思い、僕は近くの店を一軒一軒覗いて回ったが、この骨董屋が軒を連ねる場所で、たった一枚の伊万里の皿を見つけようとするほうが無茶なのだ。

約束の日が近づいてきた。諦めかけた時、この通りで最も古い店の一つが閉店することになり、全ての商品売り出す、という噂を聞いた。僕はダメもとで、足を運んでみた。

状態の良い漆器、アンティークガラス、戦前上海あたりから渡ってきた陶器の置物……やっぱり無いな、と店を出ようとした時、古い木の盆の上に並べられた雑多な物の中に、埃をかぶった皿を見つけた。

「……これだ」

一枚だけだったし、思いがけない程の安価で手に入れる事が出来た。店に戻って埃を落とすと、間違いなく足りなかった伊万里の皿だった。こんな事もあるのか、と正直驚いていた。

約束の日、僕は彼女が来るのを待ち続けた。が、客一人訪れない。閉店時間が近づいて、やっぱりひやかしたたのか、と店を閉めようとした時。品の良い和装の老婦人が現れた。嫁ぐ孫娘の花嫁道具の一つに骨董の食器を持たせたい、という。

「最近の若い人は、食器なんてこだわらへんのやろうけど、ええもん一つは持つてはって欲しいさかいに」

そう言つて丁寧に店内を眺めていたが、例の伊万里の皿の前で立ち止まった。そして、これをと所望した。

「……うちが『いとはん』て呼ばれてはった頃、家にあつたお皿によう似たはる……」

目を細めて懐かしそうに言い、僕がお祝い用に包装した皿の入った箱を大事そうに抱えて帰って行った。窓の外はすっかり暗くなり、オレンジの灯が明るさを増したように感じた時、ふと白檀の香りがした。

「……これでご満足か？」

どこへともなく僕は眩いた。その香りは暫し、鼻先をくすぐり、
やがて消えていった。

伊万里の聲（後書き）

以前、短編で出した話ですが、同じ設定で別の話を書きたくなくなったので、連載にすることにしました。マイペースにノンビリ書いていこうと思っていますので、よろしければお付き合い下さい。

鳴く香合

「ほんまにすみません」

そう言つて何度も頭を下げると、若い茶道の女師匠は逃げるようにして店を出て行つた。僕は深い嘆息を漏らす。こうなる事は予想していたが、彼女で三人目だ。

振り返つてテーブルの上に置かれた物に目を向ける。寄木で琵琶の形をした、螺鈿を施された香合。今にして思えば、骨董屋が集まる市で目を止めたのが運のつき。

「あんたも『一閑人』なんて名前の店をやつてるんだから、茶道具の一つくらい置いておかんと洒落にならんぞ」

と言われ、そんなものかと思ひ、つい購入した。想像以上に安価だったのも理由の一つだ。しかし、安いにはちゃんとわけがあつたのだ。

香合はすぐに年配の茶人の男性に売れた。ところが、お代の返金はしなくていいから、とすぐに返品された。またすぐに売れた。が、すぐに返品。さすがに疑問に思つて理由を聞いたが、相手は何も言わずに帰つて行つた。三人目が今の女師匠だ。彼女のおかげで理由がやっとわかつた。

夜、休もうとすると突然、家を揺るがすようなべいん、という大きな琵琶の音がする。その音は一晩中鳴り響くらしい。だが、家族にはその大音響が全く聞こえない。その音は香合を購入した者にか聞こえないのだ、とおびえながら話してくれた。

織田信長の所蔵していた唐銅香炉の「三足の蛙」は本能寺の変の前夜、異変を知らせるように突然鳴いた、というけれど、香合が鳴くなど聞いた事もない。それに香合は茶道具で、今までの客は全て茶道の関係者だった。

「……何が不満なんだ？最初の二人はじいさんだったけど、今のは中々色っぽいお師匠さんだったじゃないか」

そう訊ねたところで、答えが返ってくる訳でもないが。

梅雨入り前のカラリと晴れた日の午後。一組の客が来店した。大学生くらいのカップルだったが、店に入ってから、互いに言葉を交わすわけでもなく、無言のままコーヒーを飲んでいた。付き合い始めて間もないようにも見えないし、不思議な客だ、とパソコンの前に座ってメールのチェックをしていたら、

「これ……何ですか？」

彼女が声をかけてきた。それは件の琵琶の香合だった。

「茶道具で、香木や練香をいれる物ですよ」

すると彼女はいくらか、と訊ねてきた。断ろうと思ったが、ことのほか真摯な表情に押されて、今まで売った値段の半額以下の金額を伝えた。大学生には痛い出費になる額だったが、彼女はあっさりと購入を決め、バッグから包装された袋を取り出した。現れたのは真珠のピアス。それを僕たちが見ている前で、香合の中に入れた。「……こうして持つてく。くじけそうになったら、これを見て頑張るから」

彼女はそう伝えた。彼は無言のまま頷いていた。

梅雨の晴れ間、さすがに雨の後は蒸してくるようになった頃、彼が一人で店に現れた。

「ここで買った小物入れ、今でも大事にしてるみたいです」

彼女はヴァイオリニストで、現在ウィーンに留学しているという。けれど彼は、クラシック音楽の事は全くわからない。そして彼女も、いつ日本に帰ってくるのかわからない。これを契機に別れたほうがいいかもしれない、と互いに言葉にしなくても感じていたらしい。

けれどあの日。留学が決まったお祝いに、とプレゼントしたピアスを香合に入れて、大切そうに持っていた姿を見て、彼女を待とう、という気になった。今はパソコンでメール交換をしているそうだ。「アルバイトをして、ヨーロッパに行く旅費を貯めているんです。」

彼女にも会えるし、俺の専門は建築なんで、向こうの建造物も見て
回ろうと思って」

「彼女……あの入れ物の事で何か言ってますんか？」

「……？いいえ、何も」

彼はそう言っていると、コーヒーを飲んで帰っていった。

カップを片付けながら僕は、彼女は今でもピアスを香合の中に入
れたままなのではないか、と思った。あのピアスはきつと、彼とウ
インで再会する時、彼女の耳を飾るのだろう。それまでは、あの
香合がずっと守っているのだ。そうであってほしい、と坪庭の上の
青空を見上げ、心からそう願った。

葛の葉の軸（前編）

灰色の厚い雲に覆われ、空がゴロゴロと鳴り始めた。一雨くるな、と思うと一気に気が滅入ってきた。これでは店内の客は帰りそうにない。

「おい、ヒマ人」

そう思った矢先、ふてぶてしい声が飛んできた。

「……僕は、そういう名前ではありません。青柳先生」

「嫌みつたらしく『先生』なんて呼ばないでくれ。実は、買い取ってきてもらいたい物があるんだ」

「先生の気に添うような物はムリですよ。僕が扱っているのは、普段使いの骨董ですから」

「一幅の軸なんだけどな」

「……人の話を聞いてますか？」

「あんたこそ聞いているのか？俺は客だぞ。お客様は神様だろう？」

「……神様かどうかはともかく。お客様は王様ですが、中には首を切られた王様もいる、っていう名言がありましたね」

「俺にそんな口を利くのは、あんたくらいだよ」

相手は小馬鹿にしたような、どこか冷笑するような表情をした。

こういった表情が、嫌みな程、よく似合う男だ。

青柳怜。手の切れそうな文体と冷やややかで端正な容姿で、この時代に、出版すれば必ずベストセラになると言われる詩人。

付き合いは、僕がたまたま手がけた、この街のある催し物のポスト-を彼が見かけ、自分の新しい詩集の装丁のデザインを依頼してきたのか切っ掛けだった。それで彼の詩集を読んでみたのだが、正直好きにはなれなかった。確かに、言葉を選ぶ感性和、事物の本質を突く鋭さは認めざるを得ない。が、それがどこか皮肉めいていて、物事を斜めに見ているように感じた。何より、紡がれる言葉の底に、他責の空気を感じたのだ。悪いのは全て、友人であり両親であり、

学校であり政治であり、社会であり世界である、というような。

断ろうかと思った。が、僕の気を変えさせたのは最後を飾っていた詩だった。それは唯一の恋の詩で、持ち前の鋭さを残しつつも刺々しさはなく、その代わりに素直な哀しみが詠まれていた。

もう、君に逢うことはない

そして

僕の罪が消えることもない

という言葉で締められていた。

僕はデザインを二つ程用意して、彼の担当者に見せた。一つは今までのものと余り代わり映えのない、無機質で現代的なもの。もう一つは雨に濡れる山梔子の花をデザインしたものだ。最後の詩で詠まれている女性が愛した花らしかったのだ。

担当者は山梔子のデザインを見て、眉を顰めた。綺麗すぎる上に女性的だ、と言って。

「私は好きですけど、青柳怜の世界には合いません。一応お見せしますけど」

ところが青柳怜は、その花のデザインを指定してきた。誰よりも僕自身が驚いていた。それから間もなくだったと思う。彼が僕の店にやってきたのは。

「何も難しく考えることはないさ。その軸が譲られた先もわかっているんだ。先方が気味悪がって売っぱらってなければな」

「気味悪い？」

「葛の葉の絵なんだ。一見すると、普通の美人画だけど、ちゃんと白狐のしっぽが描かれてる」

「……それならいつそ、ご自分で交渉されたらどうなんです？」
「雨止んだな」

唐突に彼が言った。坪庭に目を向けると、確かに雨は上がり、雷の音も遠ざかっていた。彼は自分の名刺の裏に何か書き込むと、そ

れをテーブルの上に置いたまま立ち上がった。

「ごちそうさん。それとくれぐれも俺の名前は伏せてくれ」

どこまでも勝手な事を言い、さっさと店を出て行った。僕はテーブルに近づき、その名刺を手を取った。そこには「左京区 町
早樫真仁」と書かれていた。

葛の葉の軸（後編）

「この世界は広いようで、あんがい狭いんですな」

早樫氏はそう言つて笑つた。三度目の葉書で、僕は何とかこの家に招かれる事に成功した。無駄な労力だとは思つたが、このまま放つておくのも何だか気持ちが悪いのだ。

「ま、これなんですわ」

そう言つて、軸の入つた木箱を差し出した。失礼して、その場で広げてみる。現れたのは秋草の中に立つ憂い顔の美女。上村松園の描く美人画に似ているが、無名の画家の物だ。それほど古い時代の物ではない。紙の質感から言つて戦後に描かれたものだろう。時代というなら、黒の着付に紅裏をかえした白襟というのも合つていない。葛の葉は安倍晴明の母親なのだから、十二単でも着ているべきだろう。そして見事な白狐の尾。

「正直助かりましたわ。これは何といいますが、曰くつきでしてな」
「夜中に軸から葛の葉が出てくるんですか？」

相手は笑つて手を左右に振ると、先方には言わないようにと念を押して、話してくれた。この軸は、元々は友人の後妻の持ち物だったが、10年ほど前、彼女が突然自殺してしまつた。その後、友人は妻の持ち物を全て手放す事にし、自分に渡されたのが、この軸だつたそうだ。

「……自殺しはつた人のもん、いうのは、何や気味が悪うて。しかも絵エが白狐ですよ。手放して、後々面倒な事が起きてもかなわんし。まして出して眺める気もせえへんし。もてあましてましたんや」

僕が提示した金額に、相手は一つ返事をした。意外な程、あつさりと事が済んだので、ホツとした反面疑問が浮かんだ。何故、青柳氏は自分で、この軸を取り戻そうとせず、僕を代理人に立てたのだらう。骨董屋という肩書きは交渉するには役立つかもしれないが、

それだけではないような気がした。

梅雨時期らしい、重くて厚い雲が広がる中、青柳氏が来店した。雨の日というのは客足が遠のくものだが、彼は雨の日に好んで歩くと思えない。

「どうなった？」

僕は無言のまま、テーブルの上に軸を広げて見せた。彼の目は特に動かなかつたが、葛の葉を食い入るよう見つめていた。

「いくらかつた？」

支払った金額を伝えると、彼はいつもの冷笑を浮かべた。

「タダで譲られたはずなのに、ちゃっかりしてるな」

「だからと言って、一銭も支払わない訳にはいきませんよ。こちらの要望を聞いてもらっただけですから」

「わかつた、わかつた。ご苦労さん。その倍の金額を払うよ。手数料として」

そう言つて、懐ろに手を入れたのを、僕は制した。

「それより教えてくれませんか。何故、僕という代理人を立てるまで、この軸を取り戻したかつたのか。貴方はこの軸の経緯をよくご存じみたいだ。……元々の持ち主の方は自殺されたそうですね」

彼は黙り込んだ。また話を反らしてごまかすつもりか、と僕は嘆息を漏らした。その時、パタパタと屋根を打つ雨音がして、瞬間にバケツをひっくり返したようななどしや降りになった。慌てて僕は、坪庭の前のガラス障子を閉めた。

「……俺の知り合いに、子供の頃に母親を亡くした奴がいてな」

振り返ると、彼は軸に目を向けたままだった。そのまま静かに話し始めた。

「父親はそいつが15の時、再婚した。そいつより一回り年上の女で、父親が初婚だった。そのせいか、どこか初々しさがあつて、母というより姉ができたような気がした。そいつにとって「母親」は同級生達の母親みたいなイメージだったからな。相手も継子のそい

つにいろいろと気をつかつてくれた。父親は出張の多い仕事だったから、自然と血の繋がらない母と息子は二人きりで過ごす事が多くなつた」

彼は嗤つた。自嘲するように。

「ある日、父親の留守の間に、とうとう一線を超えた。その後も、夫であり父でもある男の目を盗んで関係はずつと続いた。義母は、もう止めましよう、と泣きながら訴えたが、そいつは自分を抑えられる程大人じゃなかつた。それに義母も口ではいろいろ言っているも、結局はそいつを受け入れていたからな。……そして、事が起こつた。義母は睡眠薬を飲んで、自ら命を絶つた」

「……どうして。何も死ぬことなんか……」

「さすがにマズいと思つたんだろつな。義理の息子の子供を身ごもつたのは」

雨は相変わらず、激しく屋根を叩いていた。けれどその音が聞こえないような空気が、店内を包んでいた。

「父親は三度目の結婚をする時、前妻の持ち物を全て手放した。そいつも義母に義理立てして、一生独り身でいるつもりはない。でも、そいつは彼女が亡くなつた時の雨に濡れた山梔子の匂いが今でも忘れられない。……義母の物を持ち続ける事で罪を意識する。それが受けるべき罰なんだ、そいつはそう思っているのさ」

彼は軸を手にして丁寧に巻いた。巻物の扱いになれている人の手つきだつた。

「やつぱり激しく降つた雨つてのは、止むのも早いな」

ふと目を転じて彼が言つた。確かに頭上の雨音はいつしか消え、振り返ると外がうつすらと明るくなつていた。彼は再度懐ろに手を入れ、財布を取り出そうとした。が、僕はそれを制した。

「お代はいりません。お持ち帰り下さい。そのかわり貴方が結婚する時、その軸を譲つてくれませんか？」

「……同情か？ 商人らしくないな」

「そんなんじゃないやありません。ただ、他の女性に罪の意識を抱えてい

る男と結婚するんじゃない、妻になる相手の女性が気の毒だからですよ」
彼は目を見開いた。が、やがて静かに微笑した。それはいつもの
冷笑ではなかった。

「俺に出すコーヒーはマンデリンじゃなくてキリマンジャロにして
くれ。今度来る時まで、ちゃんと用意しておいてくれよ」

いつもと同じ声色で言うと、さっさと店を出て行った。

ガラス障子を開けると、どこからか鳥の鳴く声があった。この季節
特有の蒸した空気。だが雨の後の空気が、どんな天気の時よりも一
番澄んでいるのだ。彼はそれに気づいていて、雨の日に出歩くのか
もしれない。

「……いや、ただの雨男かもしれないな」

そう一人でポツリを呟くと、僕はガラス障子を閉めた。

葛の葉の軸（後編）（後書き）

「一閑人」奇談は1500文字前後を目指して書いていますが、この話は下書きの時点で、とても長くなってしまう。むりやり短くすることも考えましたが、あえてこのまま載せました。次回からは1500文字以内でおさまるように書きたいと思います。

真夏のあやかしの恋（前編）

わかっていても言いたい事がある。……暑い。

その上、この街は盆地で湿度が高いので、焼けるというより茹で上がりそうだ。

坪庭に水を撒き、扇風機をかければ室内は随分涼しくなるが、開けっ放しでは、どこからともなく虫が入ってくる。結局、最後はエアコンに頼らざるを得ない。

暑い中、出歩くのも億劫なのか、もともと客足の遠い店に、客の影すらなくなる。来るのは変わり者の常連くらいだ。ネット販売という便利なものがなければ、我が「一閑人」はとっくに店終いだ。

その日も閑古鳥の鳴く中で、早々に店を閉めようとしていた時、玄関で足音がした。人の気配はするが、上がってくる様子が無いので見に行くと、そこにはヨレヨレで汗染みのついたシャツ、くたびれたスホン、汚れた靴をはいた、三十半ばの男が立っていた。どう見ても半ホームレス状態だった。汗の強烈な臭いに、失礼とは思ったが、顔を歪めてしまった。

「あの……ここは買い取りはしてくるんですか？」

おずおずと訊ねてきた。返答に困って、僕は相手を見つめる。何軒も店を回って、その度に断られてきたのは容易に想像がついた。

相手は懐ろから、ある物を取り出した。男とは、そぐわない物だったので、思わず目を瞪る。それは、かなり錆び付いてはいるが、珊瑚の垂れ飾りのついた銀の簪だった。

「……いくらでも良いんです。これを買ってもらえませんか？」

そう言った瞬間、相手は崩れるように、その場にへたり込んだ。

「ちよつ……大丈夫ですか！？」

仕方なく僕は、相手を店内に入れ、テーブルの前に座らせた。脱水症状でも起こされたら困るので、スポーツドリンクと冷たいお手ふきを差し出すと、相手はぼそぼそと礼を言っ、一気に飲み干し、

顔を拭った。汚れを取ると、意外にも引き締まった顔立ちをしている事に驚いた。

ホツとしたのか、相手は盛大に腹を鳴らせた。

「……良かったら、うちのお客さんからのもらい物なんですけど」と、僕はりんごのクッキ-を箱に入れたまま差し出した。これは先日、例の詩人の先生が取材旅行のお土産に買ってきてくれた物だ。とは言え、詩人が何の取材に信州まで行ってきたのかわからないし、何より避暑地に男が一人で行ったとも思えない。それでも、こうしてお土産を持ってくるあたり、性格はともかくマメな男だと感心する。

相手は瞬く間に箱菓子全てを平らげた。暑いかとは思ったが、僕はコーヒ-をおとして差し出すと

「こんなに美味しいコ-ヒ-、久しぶりです」

涙混じりに呟く。そう言ってもらえると、こちらとしても悪い気はしない。

「……さっきのは、簪ですか？」

「ええ。いくらでも良いので売りたいんです。とにかく手離したいんです。……俺の不幸の元凶ですから」

「元凶？」

彼は、元々はある一流企業で若くしてかなりの地位にいたのだという。大人しくて優しい妻、可愛い娘。そして有能な部下でもある美しい愛人。何の不満もなかった。

ある日、妻に付き合っ骨董市に行った時。ふと目についたのが、この簪だった。妻も愛人も着物など着ないし、買ったところで無用の長物なのだが、何故か心惹かれて購入した。

その直後、彼はあるプロジェクトの責任者に任された。成功させれば、その会社での彼の地位は約束されたも同然で、彼自身成功させる自信があった。ところが、そのプロジェクトは、最初から暗礁に乗り上げてしまった、という。

彼は、この小さなミスを隠して上司に報告した。時間をかせげば

何とかなる、と思ったのだが、壁にぶち当たったように、いつこうに進展しない。それを隠すために、嘘に嘘を巧妙に重ね、しまいには彼自身が身動きが取れなくなっていた。

そんな時、妻が離婚届を突きつけてきたそうさ。「愛人のいる人と、これ以上は暮らせない」というのが最後の言葉だった。彼も仕事の事で手一杯だったので、面倒事は御免だとばかりに、妻の要求を受け入れ、家もまとまった金額も慰謝料として妻に渡した。勿論、娘の親権も。

悪いことは重なるものだ。上司が不審に思っ、こっそり別の部下に進展具合を調べさせた。結果、彼の嘘が発覚。会社はかなりの損失を出し、彼は即プロジェクトから外された。後を引き継いだのは、何と彼の愛人の部下だったという。彼女は見事に成功させ、かなりの地位に就いた。その後、恥をしのんで彼女に上司に取りなして欲しい、と頭を下げたが、

「貴方に、もう用はないの」と含み笑いを浮かべながら拒絶された、という。結局、彼は会社を辞めた。

家族も仕事も失い、一流企業で働いていた、というプライドが邪魔をして、中々職を得る事も出来ず、気がつくとも坂を転がり落ちるように不幸のどん底にいた。それでも何故か、この簪だけはずっと手放さずにいたそうさ。

「でも、もうこの状況から抜け出したいんです。そのためにも……」僕は黙って聞いていたが、やがてレジから十万取り出して、相手の前に置いた。驚いたように彼は目を上げた。

「有難う……有難うございます」彼は押し頂くようにお金を手にした。そしてコ・ヒ・を飲んで帰っていった。

正直、彼の話は本当かどうか、僕にはわからない。けれど、この状況から抜け出したい、という思いは本当だと思った。高くついた簪だが、人助けだと思ふ事にした。

とりあえず、シルバ・クリ・ナ・で黒ずみを取り除き、磨き布で磨いてみると、思わず息を呑んだ。それは三ツ割五七桐の模様の見事な細工の物だったからだ。彼に支払った額は決して高くなかったのかもしれない。

「予想外の別嬪さんだったんだな」

光に当てて、思わずそう一人ごちた。

そんな事をしているうちに、気がつくとも終電を逃してしまったので、僕は店の二階で休む事にした。

深夜、何となく寝苦しくて目が覚めた。二階は一階より熱がこもるせいかもしれない。そう思っ、僕は水でも飲もうと、階段をすすりにつかまりながら降りた。古い町屋の階段は、ほぼ九十度の傾斜なのだ。これはおおげさに言っているわけではない。

一階に降り、ふと目を転じた時。僕は驚いて座り込んだ。腰が抜けたのだ。悲鳴を上げなかっただけマシだった。

店の奥に、青白い光に包まれた、着物姿の娘。長い黒髪に振袖姿。まるで市松人形のような。顔を袖に埋めて泣いている。

『……哀しい……恋しい……哀しい……』

そう呟きながら。どう見ても人ではない。娘の髪には、あの簪。

「……また、妙な物を……」

思わず僕は、そう漏らしていた。

真夏のあやかしの恋（前編）（後書き）

1500文字以内を目指す、と書いていながら、また長くなってしまいました。後編もできていますので、よろしければお付き合いですと幸いです。

真夏のあやかしの恋（後編）

不幸を招く簪など受け取った以上、多少の害は覚悟していたが、それから一年、僕の周囲は穏やかだった。客足が遠いのもいつもの事、身体が二つ欲しいくらいデザインの仕事が舞い込んでこないのも、いつもの事だ。正直言って、本当に不幸の簪だったのだろうか、と疑問に思う程。

「ええ簪やね」

店を訪れた客は必ず目を止めて、そう言った。

「申し訳ございません。それは非売品なんです」

相手は残念そうな表情を浮かべて帰っていく。不本意だが仕方ない。売れば必ずクレームがつくに決まっているのだ。いや、クレームなら良い。僕には今のところ害が無いが、もし売った相手が不幸にでもなったら寝覚めが悪い。いつそホープのダイヤモンドのように博物館へ寄贈しようかと思っただが、持ち主を不幸にする簪です、と言って、はたして引き取ってもらえるかどうか謎だ。

「……それにしても手のかかるお嬢さんだよな」

簪を磨きながら、僕はそう呟く。というのも銀製品は錆びやすいので、毎日磨かなければならないのだ。英国貴族に仕える執事の重要な仕事の一つが、銀器を磨く事だとか聞いた事がある。

銀には、金のような明るさとは違い、沈んだ静かな光と、どこかしめやかな美しさがある。そう思うのは、あの夜の泣いていた娘を思い出すからだろうか。あれ以降、僕は店に寝泊まりをしていないので、姿を見ていないのだが。

見ていないというのなら、あの男も今どこで何をしているのだろう。十万といえ、まとまった金額ではあるが、生活資金としてはせいぜい1ヶ月分だ。給料を得るために就職するには、定まった住所が必要だが、とても敷金礼金が払える額ではない。そして職無しの半ホームレスに部屋を貸す物好きもいない。どん底から抜け出し

たいと願っても、現実的には難しいのだ。その日その日の食費に使って、とつくに底をついたかもしれないし、もしかしたら、この街を離れる資金にしたかもしれない。彼にとっては、居心地の悪い場所ではないだろうから。

再び祇園囃子がちまたに流れる季節になった。

そろそろ閉店しようかと思っていた時、一人の客が訪れた。仕事の出来るトップ営業マンといった風情の。

「お久しぶりです」

柔和な笑顔を浮かべて、丁寧な頭を下げた。一瞬、誰だかわからなかったが、よくよく顔を見て思い出した。そして一年前との余りの違いに、空いた口が塞がらなかった。

あの後、彼は古い友人に何度も頭を下げて、暫く下宿させてもらい、その間に再就職活動を精力的に行った。その結果、実力・成果重視の資産運用の投資不動産コンサルティング会社に中途採用された。そこは寮もあったので、一石二鳥だったという。不動産と資産運用の勉強をして、がむしゃらに働いたそうだ。やはり、もともと仕事のできるプロ意識の強い人だったのだ、と僕は感心した。

「丁度、この近くの物件を見に来たので寄らせて頂いたんです。それ……」

「……何です？」

「あの簪、もう売れましたか？あるなら見せて頂きたいんです」

不幸の元凶と言い切った物を何故、と思いつつも、僕はテ・ブルの上に緋の袱紗をひいて、簪をのせて見せた。彼は、どこか安堵した表情を見せ、意外な事を口にした。

「この簪、買い戻したいんです」

「……はい？」

「それとも、他に商談でも入っていますか？」

「いえ、それはないですけど……本気ですか？」

僕は信じられない思いで念を押した。やっと不幸のどん底から這

い上がってきたのではないか。彼は苦笑しながら

「あの頃は、もう精神的にも肉体的にも限界で……何かのせいにもしなれば、自分を支えていられなかったんです。この簪が悪かったわけじゃない」

「でも、何故わざわざ……。彼女にでもプレゼントするんですか？」
「いえ、ただ手元に置いておきたいんです。実は、手放してからずっと心に掛かっています……」

確かに僕の所に一年程あったが、これといって不幸な目にあつた覚えはない。僕は買値と同じ値段で売ることにした。

「有難う、これで胸のつかえが取れました」

晴れ晴れとした表情で彼は言う。けれど僕は、何か釈然としないものが残つた。が、本人が望む以上仕方がない。

その時。くすくす……という微かな女の笑い声が聞こえた。周囲を見回したが、僕と彼以外は誰もいない。店内の空気が不意に冷たくなった。エアコンを強めたかのように。ふと見ると、彼の腕のところに一本の黒い糸が付いていた。注意しようと口を開きかけた時、ハツと気づく。それは糸ではなく、黒い髪。

髪は、彼の身体に幾筋も絡みついている。まるで獲物を捕らえた蜘蛛の糸のように。やがて彼の首筋に背後から白い腕が伸びてきた。彼を抱きしめたのは、あの日見た市松人形のような娘。僕は金縛りにでもあつたかのように、身動きも出来ず声すらも出なかった。娘は彼の肩越しに僕を見ると、ニタリと笑つた。そして姿も髪も、まるで空気に解けるように消えた。

「じゃ、これで失礼します」

そう言つて彼は店を出て行く。彼が路地を歩く音を聞いた時、一気に汗が噴き出した。僕は慌てて外へ飛び出す。

引き留めなければ。そう思ったが、声が出なかった。細くて暗い路地を歩いて行く彼の背中を僕は見送る事しか出来なかった。

真夏のあやかしの恋（後編）（後書き）

大変長くなってしまいました。読んで下さった方、有難うございます。

花守り人（前編）

「一閑人」の定休日は水曜である。特に深い意味は無い。

「水に流れる」で、商売をしている店では水曜を休みにしている所が多いのだ。とはいえ、店は閉めていても雑務を済ませる為に来ている事もあるのだが、それを見計らったように、やって来る客とというのがいる。

「ほんまに男の人なんて信じられへん」

男である僕の前で、ほぼお決まりになつた台詞を彼女は吐いた。

最も、この台詞も何度聞かされたのか覚えていない。

「信じられないのは男じゃなくて、男を見る目じゃないんですか？」
そう言つた瞬間、険のある視線が飛んできた。

「お兄さん。それが傷心の女性に向かつて言う台詞なん！？信じられへん！」

ちなみに彼女は僕の妹ではない。最初に会つた時から僕をそう呼び、それが定着してしまつた。

店を開いて間もない二月の末だつたと思う。この街では珍しく雪が降り、朝になつても坪庭がつつすらと雪化粧をしていた。

古い家は隙間風が入ってきて、とても冷える。元来、古い家屋と
いうのは夏の湿気に対応すべく、風通しが良く作られているのだ。
足下の電気ストーブから離れたくないので、コ・ヒ・を入れに行く
べきか行かざるべきか、それが問題だ、とハムレットよろしく悩んで
いると、玄関で物音がして「ご免下さい」と人が入ってきた。

こんな寒い日に物好きな、と目を向けると、そこには黒のロング
コートに藤色のストール、灰色がかつた皮の手袋をはめた若い女性
が立っていた。決して珍しい服装でも、高価そうな装いだつた訳で
もない。が、彼女を見た時、僕が連想したのは「令嬢」という死語
だつた。

優しげで柔らかい風情の整つた容姿、品の良い雰囲気。まさしく

「はんなり」を絵に描いたようだ、と思った瞬間、彼女の口から零れたのは

「お兄さん。表の信楽の壺、いくら？いくらでもええし、売ってくれへん？」

というビジネストークだった。僕は本気で、よしもと新喜劇のようにコケそうになった。

表の壺、というのは底に穴が空いていたので、傘立て代わりに使っていた古い物だった。それを説明したが、彼女はどうしても、と言って譲らず、根負けして売る事にした。

「後で受け取りに来ますし」

そう言って帰って行った後、昼過ぎに彼女の使いという男性が二人やってきて、壺を持って行った。

何者だろう、と首をひねっていると、彼女から招待状が届いた。

それは三月下旬に某デパートの催事場で催される、華道清敵流の展示会だった。初日は招待客のみ、と書いてあったし、あの壺がどんな使われ方をしているのか興味もあったので、そういった場には滅多に足を運ばないが、ノコノコと出かけていった。

様々な花が活けられている華やかな空気の中、目に飛び込んできた物があつた。それは古い黒目鉢の中に、あの信楽の壺が据えられ、そこに活けられたしだれ桜、八重桜、満天星、松。僕は花に関しては全くの素人だが、その存在感と美しさに圧倒された。その花を活けたのは清原春華。次期清敵流の家元になる女性だった。

「お兄さん、来てくれはつたんですか？おおきに」

背後からそう声を掛けられ、振り返ると、あの女性が京友禅の訪問着に西陣織の帯を締めて、微笑んでいた。

それから時々、彼女は一人で「一閑人」を訪れるようになった。

清原家は安土桃山時代まで遡るといふこの街でも指折りの名家の一つ。その家は女系一族で、当代、先代、先々代ともに婿養子を取っていた。

次代の伝統文化を担う若手の一人と言われ、彼女自身も自分の立

場に甘んじる事なく、他の流派、盆栽やフラワー・アレンジメント、必要かどうかわからないがガ・デニングまで勉強している。環境、才能、容姿、そして惜しみない努力。非の打ち所がない女性だが、一つだけ欠点がある。

男を見る目が無いのだ。

優しい誠実な人だと思ったら、アル中のDV男だったとか、真面目で堅実な人だと思ったら、ギャンブル好きで多額の借金を抱えていたとか、ストイックで大人しそうな人だと思ったら、収入の大半を風俗につき込んでいたとか。

今回は女にだらしない男で、自分の友人に手を出していたという。

「けど結婚する前にわかって良かったじゃないですか。そんな男と一緒にいたら人生めちゃくちゃですよ」

「そういう問題じゃないやん！もつとマシな慰め方できひんの？」

「はいはい。おわびにコ・ヒ・おごりますよ」

「……お兄さん、それ嫌み？私がコ・ヒ・あかん事知ってはるやろ？」

「そうでした。紅茶を用意させて頂きますよ。キ・ムンでしたね」

ちなみに、表向き彼女はお育ちの良い、おっとりとしたお嬢様で通っている。周囲もそういう目で見ていると思う。が、僕に言わせれば猫かぶりも甚だしい。いや、猫というより化け猫かもしれない。差し出された紅茶のキ・ムン香を楽しんだあと一口飲んで

「……やっぱりお兄さんの入れてくれはる紅茶が一番美味しいわあ」

と可愛い事と言うかと思えば

「いっそ、このお店閉めて、カフェでも始めたらええやん。どうせ元取れてへんのやろ？」

と可愛くない事を言う。それにしても男を見る目もないのに、何故自分で相手を探そうとするのか、わからない。家族だって不安だろう。大体、彼女の立場なら、人柄・家柄ともに申し分のない話がいくらでも舞い込んできそうなものだが。

「そつだ。良い物が入ったんですよ」

僕は二ヶ月前に買い取った、古備前の徳利を見せた。店頭に飾っていたのだが、お酒を入れるには大きすぎるのか、売れずにいた。でも一輪挿しにするなら丁度良いと思つたのだ。

「ええ器やね。白玉椿を活けたら映えそうや」

パツと彼女の目が輝いた。やはり彼女にとつて花は一も二も無く重要な存在らしい。

「椿を活けるには、あと半年近く待たないといけませんけどね。二、三日預けますよ。気に入ったら、考えてくれませんか？」

そう言つて彼女に徳利を預けた、その一時間後。そろそろ自宅に戻ろうかと思つていた矢先。バタバタと走ってくる音がして、「すみません！」という声と同時に男性が慌ただしく上がつて来た。まだまだ残暑の厳しい中を走つてきたのか、幾筋もの汗が流れていた。「ここに、古備前の徳利があるつて聞いたんですけど」

「……あれは、今し方、人に預けてしまつて……」

「返してもらえませんか！？親父の形見なんです！この通りです！」
そう言うなり、その場で深々とあたまを下げてきた。思わず僕はめまいがした。この二ヶ月前、全く売れなかつたのに、ほんの時間のズレでこうなるとは。つくづく商いというのは縁なんだな、と痛感していた。

花守り人（中編）（前書き）

予想以上に長くなってしまいましたので、中・後編に分けることにしました。気が向いたら読んでやって下さい。

花守り人（中編）

「私は、どうしても、これを花器に使いたいんです」

予想はしていた。彼女は元来、花に関しては子供並みに強情なのだ。

「それは父の形見というだけでなく、父が懇意にしていた備前焼の陶工から、特別に譲ってもらった物なんです」

「大切な物ゆうことは、よくわかりました。けど、一度は手放した物を返せ、言うんはムシが良すぎるのと違いますか？」

「それはわかっていきます。でも、どうしても返して頂きたいんです。元の持ち主も、負けじと食い下がった。この徳利はよっぽど大事な物らしかった。

「けど、徳利として使うだけですやろ？ 私なら、別の方法で、この器を生かせます。大事にしますから、諦めてもらえませんか？」

「……物に思いが宿る、って貴女は思った事ありませんか？」
不意に、彼が真顔でそう言った。彼女はハツと息を飲んだ。

「この徳利が、貴女から見て価値がある、と思つたのは、僕の父がそれだけ、その器に思いを込めたからです。器は、その思いに込えた。器を手放すという事は、亡き父の思いを手放すという事なんです。それに気づいたから、無理は承知で頼んでいるんです。お願いします」

そう言つて、彼は深々と頭を下げた。その姿に、彼女は沈黙していたが

「……わかりました。その徳利も、貴方の手元にある方が喜びますやろ」

意外にも、そう引き下がった。僕は驚いて、彼女を見つめた。

「有難うございます！」

心底ホツとしたように、満面の笑みを浮かべて彼は言った。

この徳利は、彼の売値のほぼ倍の額で僕の所に来たようだった。

が、彼は文句も言わずに、買値を支払った。

「ほな、私はこれで……」

そう言つて、彼女は玄関へと向かったが、彼が慌てて

「あの、せめて譲ってくれたお礼に、何かごちそうさせて下さい。

丁度昼時ですし」

「おおきに、けどお構いなく」

「それくらいさせて下さい。父が愛用していた徳利を気に入って下さったお礼も兼ねて」

彼は先に立つて、店を出て行き、彼女は諦めたように付いて行った。

どんな事になるかと思つたが、彼女があつさりと引いてくれたので、僕自身は胸をなで下ろした。が、それから彼女はびたりと姿を見せなくなった。今までも月に一度、来るか来ないかだったので、頻繁に来る客ではなかったのだが。やはりこの件で、すっかり信用をなくしてしまったのかも思れない、と思つていた頃。

あの徳利の持ち主が風呂敷包みを抱えて店に現れたのだ。

「実は、お願いがあつて来たんです。……こんな事、お願いしているのかわかりませんが、貴方は彼女と親しい知り合いのようなので、そう言つと、彼は僕の前で風呂敷を解いた。

「えらいご無沙汰してしもうて、ご免なさい、お兄さん」

水曜日に彼女が現れた。最も今回は、僕の方から葉書を出して、定休日にご来店頂きたい、と依頼したのだが。そんなオーソドックスな方法を用いたのは、僕が彼女の携帯番号もメルアドも知らないからだ。

彼女にテーブルの前に座るよう促して、僕は風呂敷包みを目の前に置いた。驚いたように彼女は僕と包みを交互に見つめた。

「例の徳利の持ち主から、貴女に、と」

「……………来はつたん？ここに？いつ？」

「一週間程前です」

「……あの徳利が縁で、僕達は暫く付き合っていたんです。最も彼女が清蔵流の家元のお嬢さんなんて知りませんでした。『清原』って名字は、そう珍しくもないですし、彼女も何も言わなかったし。……でも、付き合い始めて4ヶ月後、丁度クリスマスマスの時に、家の事を話してくれました。正直、驚きました。

『黙ってて、ご免なさい。どうしても言えへんくて……家元のあととり娘なんてゆうたら、ひいてしまっやろ?』

『……男の兄弟は?』

『いてへん。私、一人娘やし……けどな、あととり娘やから家を継ぐって決めた訳やない』

そう言うのと僕をまっすぐに見て、こう言っただんです。

『あの家に生まれたんは、私の運命や。けど、継ぐと決めたんは私の意思や』

……頭を殴られた、と思うくらいショックでした。……僕も、彼女に隠していた事があつたんです。年が明けて、少しで良いから会えないか、と連絡をして、下鴨のカフェで待ち合わせをしました。できるだけ静かな場所が良かったので。

……僕には、妻がいるんです。でも一緒には暮らしていません。妻は実家で、療養生活を送っているんです。妻の病気の切っ掛けは、生まれて半年も経たなかつた僕たちの子供を失った事でした。妻は毎日、口癖のように僕に謝りました。子供を失ったのは哀しかったしショックでしたが、何かに憑かれたように僕に謝り続ける妻の姿を見るのも苦痛でした。だから、もう謝らなくていい、あの子の事は忘れよう、僕はそう言っしまいました。それきり妻は子供の事を口にしなくなりましたが、言葉にしない分、哀しさや罪悪感を身の内に溜め込んでいたんです。

その内、料理や洗濯の段取りが悪くなったり、その日あつた出来事や会った人を忘れるようになりました。おかしいな、と思っていたら、真夜中にふと目を覚ますと妻の姿が無いんです。驚いて探し

に行く、家の近くの公園の中を彷徨うように歩いていました。

病院に連れて行った結果、若年性痴呆症だと医師に言われました。原因は様々ですが、極度のストレスが引き金になる、と言われました。

痴呆症なんて、老人がなるものだと思っていたので、信じられなかったし途方に暮れました。僕には仕事がありますし、今後の治療費やら何やらを考えると辞める訳にはいきませんし、とても妻の面倒は見られません。それで、妻は実家に帰る事になりました。家を出るとき、妻は僕に署名捺印をした離婚届を差し出しました。

『私はいつか、可哀想なあの子の事も、貴方の事も忘れてしまおう』

そう言って泣く妻を僕は抱きしめる事しかできませんでした。

……その離婚届に僕は署名しませんでした。でも、破って捨てる事もできなかったんです。

その後、新居として購入したマンションも、お金になりそうな物も全て売りました。あの徳利も、その時手放したんです。小さい1Kの部屋を借りて暮らし始めたんですが、思い出す事は妻が元氣だった時の事ばかりです。あの徳利に酒を入れて、二人でよく晩酌しました。

『ねえ、この徳利、最初の頃はいかにも頑丈そうなおつとした印象だったけど、最近肌合いが柔らかくなってきたような気がしない？』

『そう言えば、親父が焼き物は使えば使うほど姿を変える、なんて言ってたな』

そんな他愛ない会話を思い出す度、どうしてもあの徳利を取り戻したくなって……

それが縁で、彼女と出会うなんて、本当に皮肉な話です。けど、彼女と一緒にいると何もかも忘れられました。この状態が、ずっと続くなんて思っていないませんでしたし、いつかは事実を話さなければいけないと思ってましたが、それでも彼女という時間を失いたくない

かつたんです。

でも、彼女が『生まれてきたのは運命、選んだのは私の意思』そうはつきり言った時、自分の甘さとずるさに気づいたんです。

……僕は、会社を辞めて、妻の側で看病する決心がつかしました。

花守り人（中編）（後書き）

後編は後日載せます……1500文字以内って何の話？とっつこま
れても何も言えません。

花守り人（後編）

「彼女は、僕を責めるような事は何も言いませんでした。ただ、この街を離れる前に一度、家に来て欲しい、そう言っただけでした。

仕事の引き継ぎやら、引越しの手配やらで、この街を離れる事になったのは二月の下旬に決まりました。そして、この街を出る前日、彼女の家を訪れました。僕はつきり、街中の古い町家に住んでいるのかと思いましたが、郊外にあるらしく、私鉄で終点まで行って、そこから十五分くらい歩いて行きました。朝の雪が所々に残る竹林を抜けて、予定していた時間より早く着いてしまつて。どうしよう、と門の前に立っていたら、幸いその家の秘書の方が気づいて、中に招いてくれました。

彼女は東向きの庭に面した座敷にいました。髪を一つにまとめて、化粧気もなく、紺の作務衣を着ていました。目の前には常滑の壺と、その傍らの白い布の上には辛夷と青いナナカマドが置いてありました。彼女はそれらに向かつて、深々と手をついてお辞儀をすると、辛夷に手を伸ばしました。花を活ける、ただそれだけなのに、ぴんと張り詰めたような緊張感を感じました。声も出せないような空気が流れていて、それは彼女が花を活け終えて、再びそれらに向かつて頭を下げるまで続きました。

……その姿を見た時、僕は美しいと思いました。彼女は綺麗な人ですけど、花を活けていたあの姿が、それまで見た中で、一番美しかった」

「それを彼女に伝えましたか？」

その時になつて、僕は口を挟んだ。すると彼は苦笑した。

「伝える前に、怒られました」

「怒つた!？」

「こんな恰好をしている時に来て、それを黙つて見ているなんてヒドイ!つて」

思わず僕は笑ってしまった。彼女らしい、そう思ったからだ。彼もつられて笑い、ふと懐かしそうな目をして

「……辛夷は別名田打ち桜と呼ばれる、いわば春を告げる木で、ナカマドは七回竈に入れても燃えないという頑丈な木だ、と僕を駅まで送る途中の道すがら、彼女は教えてくれました。彼女なりのエールなんだ、そう思いました。ゴメンとかすまない、とか言わなければいけない台詞がありました。結局いえませんでした。そして最後までさよならも言わずに僕たちは別れました。

でも、彼女の花を活ける姿を見た時、ふと思っただんです。何か花器を贈りたい、と。それで父が懇意にしていた備前焼の陶工に頼み込んだんです。花に敬意を込めて活ける、そして花を最も美しく活ける事のできる、花守りの為の器を作ってもらいたい、と」

彼女は風呂敷を解いた。桐箱の中から現れたのは、備前焼の水盤。その器は半分は窯変しており、青みを帯びた灰色になっていた。それは光を受け、月の光のような銀色に輝いた。

彼女はそれを黙って見ていたが

「お兄さん。私なあ、お母さんにもお祖母さんにも、家を継げって言われた事ないねん」

ポツリとそう呟いた。それは意外な台詞だった。彼女の立場なら、家を継ぐ事が暗黙の了解になっているのだと思っていた。

「それどころか『好きなように生きよし』って言わはってた。そう言われる度、二人には他にやりたい事があつたけど、諦めてきたんかな、思ってた……けどな、家には先代さん達が残した文書やら巻物やら、昔の花器やらがぎょうさん残ってる。それを見て、触れて、私はいつも感じてたんや。ただ時間が経って続いてきたんやない、先代さん達が守ってきたから、この家も、花も、続いてきたんや、て。……私もそれを守る、守りたい。そう思ったから継ぐ事を決めた。

でも、だからこそ、私は一緒にいる人は自分で探して自分で決め

る、そう思ってた。……あの人に最初に会った時、物に思いが宿る、
そう言わはったやろ？その時、この人や、ってそう思ったんやけど
……」

彼女は苦笑を浮かべた。

「まさか奥さんがいる人やなんてなあ。しかも、それを黙ってはつ
たんやで。そら確認しなかった私も悪いけど、結婚指輪もしてへん
かったし……すっかりだまされた。お兄さんの言つとおり、私はほ
んまに男の人を見る目ないわ。」

……けど、そう思っても何や嫌いになれへん。かえって気の毒でな
……あの人も、あの人の奥さんも」

そつと水盤に手を伸ばして、優しく撫でた。いたわるように。

「お兄さん、今日見た事、誰にも言わんといってくれる？お墓の中ま
で持ってつてくれはる？」

「……いいですよ。約束します」

そう言つと、彼女は手を伸ばして僕の手を握ると、ポロポロと泣
き出した。今まではよく怒ってはいたけれど、涙を流した事は一度
もなかった。声を殺して、小刻みに震えている彼女の手には、僕はも
う片方の手で励ますように軽くぽんぽんと叩くと、そのままそつと
重ねた。こんな時、優しく抱きしめてやるのが、いい男なんだろう
な、と思いつながら。

清蔵流の秋の展示会が、今回もデパートの催事場で開かれた。

例によつて、招待客のみという初日に出かけ、いつもとは違う花
に囲まれた空間に足を踏み入れた。

そこに展示されていた「月の桂」というタイトルの花。あの水盤
に、まだ花のない銀木犀、檜紅葉、竜胆が活けられていた。

日本では月には兔だが、中国では桂の木を切る男がいるのだとい
う。この桂は木犀の事を言っているのだそうだ。木犀は切つてもそ
こからすぐに芽を出す。その生命力の強さに欠けては満ちる月の再
生を甘美でどこか懐かしい香りに月の優美な姿を重ねたのかもしれ

ない。

「あいかわらず花で遊んでいるようやね」

僕の隣にいた婦人達から、そんな囁き声が聞こえてきた。それは褒め言葉なのか、けなしているのか、僕には判断がつかなかった。

ふと見ると、彼女が後援会の人かもしくは関係者と談笑している姿が目に入った。それを遠目に見て、僕は出入口へと踵を返した。そして持参していた、近々「一閑人」で催されるガラス細工の作家のギャラリーを兼ねた即売会の案内葉書の表にメッセージを書いて、受付係の人に「若宗匠に」と渡した。

『月の桂、拝見しました。先日、当店に漆桶がきました。何十年も使い込まれ、古さびた良い味が出ております。貴女なら、どんな花を活けられますか？』

直接伝えても、渡しても良かったかもしれない。けれど、あの場にいたのは「清巖流次期家元 清原春華」の顔をした知らない女性だった。

僕は足早にその場を離れた。背後のむせるような花の気配から逃れるように。

花守り人（後編）（後書き）

次は一話完結の話を書きたいと思っています。つねに、そう思っています。

想いが空に届く日（前編）

その日、この店には珍しいお客が現れた。

「このお店、懐中時計っておいてはりますか？」

この街の北部の公立中学校の制服。骨董品に興味を持つ年頃とも思えないし、この年代からしてみれば骨董屋なんて、神社仏閣と同じくらい線香臭い場所だろう。

だが「懐中時計」という言葉に、思わず僕達は顔を見合わせた。最も、僕が顔を合わせた相手は、女子中学生には見えていないだろうが。

切っ掛けは真夏の最中、ふらりと青柳先生が訪れた事だった。

色白で貧血症かと思うような男が、真っ黒になっていたので、海にでも行ってきたのか、と訊ねると

「パプアニュー・ギニアに行ってきた」

という思いもかけない返事。彼の趣味はフィッシングで、知人のプロのアングラ（釣り師）について行ったのだという。ニュー・ギニアは、気軽にレジャーとして楽しめる程、設備等がまだ整っていないので、日本のアングラはとも少ないが、そのかわり超大物が狙えるミラクルフィールドなのだそうだ。

釣りが趣味の文学者といえば、真っ先にヘミングウェイが浮かぶ。彼は釣りだけではなく猟も好んだ、アウトドア派の文学者だった。とてもタイプが違うと思ったが、考えてみれば、日がな一日釣り糸を垂れ、思案にくれながら獲物がかかるタイミングを待つ、というのはこの先生らしいと言えなくもない。

「ついでにコ・ヒ・も買ってきた。暫く俺には、これを入れてくれ。それとあんたに土産だ」

ゴロカ・コ・ヒ・豆と一緒に、意外な物を渡された。それは鎖もなく、動かなくなった古い懐中時計。状態は、お世辞にも良いとは

言えないが、文字盤中央に桜の花のような彫金が施された、グリユエンの時計だった。

「ラバウルの雑貨店に置いてあった。普通の観光土産より、そういう物の方が面白がるんじゃないかと思ってな」

相変わらぬのママさである。それを無意識にしているのだから、感心してしまう。彼が、特定の相手をつくらなくても女の影が消えないのは頷ける気がした。

その日は珍しく、先生は遅くまで長居して帰って行った。久々の帰国で、とにかく話す相手が欲しかったのだろう。いつもより閉店が遅くなり、片付けをしている最中、ふとガラス障子を見た瞬間。

心臓が止まるかと思った。

ガラスに写っていたのは、大日本帝国陸軍の歩兵隊の制服を着た若い男性。思わず振り返ると、ガラス越しに見たものが、そこに立っていた。

僕が悲鳴をあげるより先に、彼はびしっと敬礼をし

「自分は、歩兵第41連隊所属歩兵上等兵 葛城大悟であります！

この度、恥を忍んでの帰国とあいなり、誠に遺憾の極みであります！」

霊とは思えない程、よく通る声で、そう叫んだ。僕は、思わずテーブルの前のイスに座ってしまった。考えるまでもない。原因は懐中時計だ。それにしても……と僕は嘆息を漏らす。どうせなら若い女性の霊の方が有り難いのに、何故「質実剛健」を地でいっているような男の霊なんだ……と。

彼はこの街の出身で、出兵する前は東京で暮らしていたという。

こうして、この世界にとどまっているのだから勿論思い残す事があるのだろうし、それは当然家族の事だろうと思った。が、彼はその事を一切口にしない。家族の事を話すのは、女々しい事だとも思っているようだった。

彼の時間は昭和17年で止まっているが、それから半世紀以上の

時間が流れていることは、薄々感じているようだった。だが何となく感じているのと、実感するのでは意味が違う。お客も来ない事だし、とりあえず翌日の午後、外へ出てみた。彼は懐中時計のあるところにしかいられないようなので、僕が持ち歩いたのだが

『……こ、この国の女子は……いつから裸のまま出歩くようになったのでありますか！』

開口一番、彼はそう叫んだ。

誤解のないように言っておくが、決して裸だったわけではない。キャミソールにショーツパンツという露出の高い服装だっただけである。

だが、彼の時代は人前で女性が肌をさらすことは御法度だったのだろう。ミニスカートの流行したのは、確か戦後だったはずだ。

それだけではない。「男が何故、女のように髪を伸ばしているのだ」とか「何故赤毛なのだ」とか「何故、皆ちんどん屋のような恰好をしているのだ」とか、答えようのない質問をしてくる。

「今の時代は、これが普通なんですよ。誰でも、こういう恰好をしています」

『自分の妻は、そんな真似は致しません！侮辱しないで頂きたい！』と、烈火の如く怒り出す始末。確かに彼の奥さんは、していないだろう。というか、していたら逆に問題だ。ご存命なら80を過ぎているはずなのだから。

どこか変わっていない場所、と思い、寺なら変わってないだろう、と東山の麓の寺へ連れて行った。だが、この寺は観光のメインの場所だ。平日だろうと、どんな季節だろうと関係なく、山門までの坂道は芋洗いの状態で人が溢れかえっている。

『……祭りでもありますか？』

呆れたように彼は言い、僕も夏の暑さと人ゴミに疲れ果てて、早々に退散した。どこか見晴らしの良い所と、街中を流れる川べりへと足を向けた。既に夕暮れ時となっていたが、料亭が並び、床が出ている風情は、そう変わりないと思っただし、丁度良いだろうと思っ

たのだが。これが大失敗だった。

この川には名物がある。等間隔で座るカップル達だ。

彼は、結婚していても妻が夫の三步後ろを下がって歩くという時代の人だ。若い男女が並んで座り、人目を憚らない様子に、ふつつと怒っているのが手に取るように伝わってきた。が、今更後戻りする訳にもいかない。とにかく次の橋の所まで、足早に通り返ぎようとした時。

ピキツという音がするような空気。見ると、一組のカップルが、すっかり二人きりの世界に入り込んでしまつて、キスを交わし始めた。

『じつ……じつ……じつ……この不埒者が！』

思わず、鶏のコケコッコココという関の声を連想した。また、本気で他人を「不埒者」と怒る声を生まれて初めて聞いた。

『そこに直れ！性根を叩き直して。』

思わず僕は小走りになつて、その場を離れた。わめきながら、嫌でも彼もついて来る。彼は懐中時計に憑いているわけだから。地縛霊ならぬ物縛霊とでもいうのだろうか。この大音響が聞こえるのが僕だけで良かった、と思う反面、何故自分だけなんだ、という理不尽さも感じつつ、店に戻った。汗をかいたが、決して暑いせいだけではない。

彼は怒り狂うかと思つたが、予想外にも静かだった。開け放した坪庭の前に、脱力したように腰を下ろす。余りの変わりように、気分でも悪いのかと思つたが（霊に気分の良い悪いがあるのかは謎だが）、彼は背を向けたまま、ポツリと呟いた。

『自分が守つた大義とは、何だったのでありましょうか』

そして彼の姿は陽炎のように消えた。

僕はパソコンでニュー・ギニア戦線の事を調べてみた。

詳細な記録は見つからなくても、目に入ってくる情報は、過酷なものばかりだった。「ジャワの極楽、ビルマの地獄、死んでも帰れ

ぬニュー・ギニア」と言われたように、想像を絶する悲惨なものだったのだろう。今日のカップル達と変わらない年齢の若者が、「お国の為に」という大義のために戦地へ向かう。その大義には「家族や大切な人を守る」という意味も含んでいたはずなのだ。

彼の所属していた歩兵第41連隊はその後、レイテ島へ向かい、終戦の1ヶ月前に玉砕する。

この懐中時計が、状態が悪いとはいえ、こうして残っていた事は奇跡なのかもしれない。人からの貰い物ではあるけれど、せめて縁のある人に渡したいと思った。が、東京といえば、大空襲があり、焼け野原になったと聞いている。正直、彼の家族が生きている保証はどこにも無いのだ。

想いが空に届く日（後編）

定休日の午後、僕は懐中時計の修理が可能かどうか見てもらうために、街中へ出かけた。

『高い建物がたくさんありますな……』

不意に傍らから、そんな声があった。見ると、彼が林立するビルを見上げて、ポカンと口を開けている。

「この街は高い建物が建てられる場所が決められているんですよ。この辺りとか、あとは駅の周辺から南の方かな。でも、他の街には、もつとずっと高い建物がたくさんありますよ。ここは観光が資源の街なので、景観条例があるんです。最も、古い町並みを知っている人が見たら、随分変わってしまったでしょうけど」

通りを奔めくように走る車の群れにも驚いて見ている彼を引つ張って、僕は狭い一通の路地に入った。そこには昔気質で愛想の悪いけれど腕はすこぶる良い時計の修理の専門家の店があった。彼は時計を見て

「あかんな」

一言呟いた。

「……ムリですか、やっぱり」

「こないになってもうたら、中の部品をそっくり変えた方が早いわけけど、こんな精巧な部品、作れる店も職人も、今の時代には、いてへんやろ。仮にいはったとしてもオ・ダ・メイドになるやろっし、えらいかかるで。アクセサリ・や思て、持っってはったらどうや」

予想はしていたが、やはりガツカリした。けれど、これ以上の奇跡を望むのは傲慢というものかもしれない。

店を出た時、彼は街を見渡せる場所はないか、と訊ねてきた。せつかなので駅まで行き、その空中径路へ上がった。彼は目の前のタワ・も、ポカンとして見ていた。

『こんな物、いつの間に来たのでありますか？』

「詳しくは知りませんが、戦後のはずですよ。海のないこの街の瓦屋根を波に見立てて、灯台のイメージで作ったとか何とか……」
彼はそれを見つめ、所狭しと並ぶ建物を見つめ、地上を行き交う車や人の波を見つめて、呟いた。

『この国は、平和なのでありますね。もう空襲サイレンや艦載機の影に怯える事もない』

「……僕は、戦争を知らない世代です。だから貴方に語れるものは何もありません。でも、この平和は残された人々が必死になって築き上げたものだと思っています」

彼は、無言のままだった。ただ黙って目の前の風景を見つめていた。

店に戻る途中で、どこからか寺の鐘の音が聞こえてきた。

『鐘の音だけは、変わりませんな』

彼は微かに笑ってそう言うと、再び陽炎のように消えた。

その日の夜。僕は酒屋に行つて、この街の地酒の小瓶を購入した。店に戻り、テーブルの上に唐津のぐい呑みを二つ用意し、向かいに懐中時計を置いた。

「良かったら呑みませんか？せめて呑んだ気分だけでも」

目の前にあるけど呑めない、というのはおあずけをくらったようで辛いかとは思つたが、試しに声を掛けてみた。すると影が揺らいで、彼が現れた。

『自分は下戸でありますので、気持ちだけ頂戴いたします』

その夜、彼はやっと自分の事をポツリポツリと話してくれた。当時は見合いの席で初めて会い、お互いをよく知らないまま結婚するのが普通だったが、彼の妻は友人の妹で、子供の頃から知っていたらしい。それだけでも自分は恵まれていた、と。そして出兵する時、妻のお腹の中には、初めての子供がいたのだという事も。

「東京では、どちらに住んでいたんですか？」

『五反田であります』

思わず手を止めた。五反田は大空襲を受けた場所のはずだ。

「……奥さんや、お子さんに会いたいですか？」

彼は無言だった。が

『……自分の子孫が、もし生きているのなら、一目でも会ってみたいであります』

最後まで、奥さんに会いたいとは言わなかった。昔の男性なので、そう言う事は照れくさいのかもしれないし、そう思う事は恥だと思っ
ているのかもしれない。でも、それ以上に彼は感じているのだろ
う。自分の妻は、はたして終戦まで生き延びてくれたのか、と
仮に生き抜いてくれたとしても、もしご存命なら80才以上。
既に亡くなっている可能性を否定できないのだ。

だからこそ、やはりこの懐中時計を彼の縁者に渡したい。僕はそ
う思った。

次の定休日、僕は彼が昔住んでいた住所を聞いて、訪ねてみた。

この街は戦火をまぬがれたので、上手くいけばまだ、そこに子孫
の方が住んでいるかもしれないと思ったのだが、そこは既にマンシ
ヨンが建っていた。近所の人に聞いてみたが、戦前の事はわからな
い、という話だった。ついでに奥さんの実家があつた場所にも行っ
てみたが、そこも知らない人が真新しい家を建てていた。当然、戦
前の住人を知る人はいない。

やはり半世紀以上の時間の壁は厚かった。

八方塞がりのまま季節は移り、紅葉にはまだ早いが、金木犀の甘
い香りが漂うようになって、秋の気配となった頃。

店先に、懐中時計を探す女子中学生が現れたのだ。

「……お嬢さんが使ってますか？」

「プレゼントにしよ、思て。私の曾お祖母ちゃんに。もうすぐ誕生
日やねん」

「曾お祖母さんに懐中時計、とは変わってますね」

「家の曾お祖母ちゃん、よくその話すんねん。曾お祖父ちゃんが、

お父さんから買ってもらった懐中時計、えらい大事にしはってた。アメリカさんの時計やけど、こっそり隠して持って、兵隊に行かかった、って。そんなん持ってたら非国民言われてまうから。桜の模様のある、きれいな時計やった、て」

彼の気配が動揺しているのが伝わってきた。

「……曾お祖母さん、お元気なんですね？」

確認するように、思わず訊ねた。

「元気や。家でいっちばん元気やで。東山で料理旅館をお祖父ちゃんとお祖母ちゃんとしてはんねん。常連さんしか来いひん店やけど」

「実は、懐中時計が今、当店に一つだけありまして」

そう言つて、僕は彼女に見せた。

「桜の模様や」

「ええ。もし、曾お祖母さんがこれを見て、気に入って下さったら、お嬢さんのご用意できる金額でお売りしてもよろしいのですが」

「えー？ サプライズにならんやん」

「でも気に入って頂けなかったら、困るでしょう？ まして曾お祖母さんは、懐中時計に思い入れがあるようですから」

彼女から、その店の場所を聞いて訪ねようと思ったが、彼女は自分で案内する、と言った。見知らぬ男が突然訪ねて来たら、曾お祖母さんがびっくりする、と思ったのだろう。

あえて歩いて行く事にし、その道すがら、彼女は色々と話してくれた。

旦那さんの出兵後、曾お祖母さんはこの街に戻って出産し、そのまま終戦を迎えたこと。生まれたのは男の子で、名前は父親から一文字貰つて「悟」と名付けられた事など。

古い家並みが続く通りの、他の民家と変わらぬ店先で、小柄な老婦人が割烹着を着て箒で玄関口をはいていた。灰色の髪は豊かで、実年齢より若く見えた。するとどこからともなく野良猫が現れて、婦人の側に座り、甘えるように一声鳴いた。それに気づいて彼女は振り返り「いらっしやい」と温かな声で言つと、割烹着のポケット

から懐紙に包んだものを取り出した。中に入っていたのは数匹のにぼし。この地域では、にぼしからダシをあまり取らない。おそらく猫の為に購入しているのだろう。それを手のひらにのせて猫の前に差し出すと、当然の権利と言わんばかりに、くわえて去って行った。それを穏やかな目で見送る。

「……………」

背後から、涙混じりのような、絞り出すような声が漏れた。まるで、その声が届いたかのように、老婦人は顔を向けた。そして僕を見て、驚いたように目を見開く。正確には、僕の背後を見て。

次の瞬間、彼女はふわりと微笑んだ。

「お帰りなさいませ。長いお留守でしたね」

空気が、震えた。泣いているような気配。思わず僕は振り返った。が、そこに彼の姿はもう無かった。

「いややわ、大お祖母ちゃん、先週末たばかりやん。長い留守なんて、おおげさな」

「そつやっとなあ」

近づいてきた孫娘に、のんびりとした口調で答える。この年で耳が遠くない、というのはすごい事だと思った。

「あのな、大おばあちゃんに見てもらいたい物があんねん」

「……………いえ、その必要はなくなりました」

そう言って、僕は懐中時計を差し出した。

「これは、貴女が持っているべき物のようです」

「……………おおきに」

彼女は愛おしそうに時計を両手で包み込んだ。

「……………長生きはするもんやねえ、この年になって願いが叶うやなんて」

僕は一礼して、その場を離れた。どこからともなく鐘の音が聞こえてきた。西の空が茜色に染まる。静かに一日が過ぎようとしていた。

想いが空に届く日（後編）（後書き）

例によって長くなりました。この話は一気に載せたほうが良いと思
ったので、後編も掲載いたします。この話の僕同様、私も戦争を知
らない世代です。その世代がこういう話を書いていいものかどうか
考えましたが、ラストの曾お祖母さんの台詞がどうしても書きたく
て、書かせていただきました。

暖かな雪（前編）

古風な女だ、僕はその客人を見る度、いつもそう思った。

それは常に着物で来店するからではない。佇まいが、そんな印象を与えるのだろう。

最初に店を訪れたのは、桜のまだ咲かない、春の肌寒い日だった。彼女は渋い結城紬を着ていて、坪庭近くの席に座ると、コーヒーをオーダーした。結城紬はかなり高価な物だし、おそらく祖母か母親が着ていた物なのだろう。そこに明るいつもりの萌黄の帯をしめていた。素人の僕が見ても、着物に着慣れている人なのだろう、と思った。

その後、夏の盛りにも現れたが、その時は亀甲の白い上布を着ていた。同じ席に座り、文庫本を読みながら、時々ほんやりと外を眺める。絵になるのだが、どこか寂しげだった。

そして観光客が訪れる紅葉のシーズンが到来となった。

この辺りも夏と比べると、人通りが多くなる。僕の店にも骨董目当てというよりは、休憩がてらに入ってきてコーヒーや紅茶を飲んでいく客が増えた。

そんな中、彼女がふらりと訪れた。この日は泥大島を着ていた。

「春結城秋大島」という言葉があるが、今時それを実行している人などいない。彼女は代赭色の染めの帯をしめていて、いつもの席に腰を下ろした。そしていつも通りにコーヒーをオーダーしてきた。

他の客人達が賑やかに退散していった後、

「あの……」

彼女が声を掛けてきた。それは初めての出来事だった。

「このお店では、古い物を扱ってはるんですよね？」

「はい。何かお探しですが？」

「新しい物は、引き取ったりはしはらへんのですか？」

「新しい……といえますと？」

「十年くらい前の物です」

「……物によりますが……何ですか？」

「オルゴールです」

そう言うと、彼女はバッグからある物を取り出した。それはバラの象眼が施されたボックス型のオルゴールだった。

「リュージュ、ですね」

スイスの有名なオルゴールのメーカーの物だった。が、それは音が鳴らなくなっていた。

「手放したいんですけど、ほかす気いにもなれへんくて。他の人にあげる事も考えたんやけど、壊れてる物渡すのも何やし……もし、リュージュのオルゴールを集めたはるコレクターさんがいたはるんなら、その人に渡して欲しいんです」

「……でも、リュージュなら修理もしてもらはるはずですよ？」

彼女は立ち上がると、少しだけ微笑んで

「私には、もう必要ない物なんです」

そう告げると、静かに店を出て行った。

「^{かなで}奏、あのオルゴール、ほんまに売っ払ったん!？」

「そんな驚く事でもあらへんやろ」

彼女は台所でたてた薄茶の入った赤楽茶碗を当たり前のようにコタツに入って、すっかり和んでいる幼友達の前に差し出した。

「そやけど……」

「どうぞ。冷めんうちに」

促されて、相手は干菓子を口の中に放り込むと、茶碗を手にした。

「……やっぱりお茶はお抹茶やな。海外にいると、脂っこいうえに味の濃い物が多くて……って、それはともかく」

彼女は茶碗を置くと、奏を見据えて

「あれだけは手放さなかったのに、何でいきなり？」

「……いつまでも昔の事、引きずってたかて、仕方ないやろ」

「……最近スランプや、っておばさんから聞いたけど、それが理由？」

「それは関係あらへん。夏紀かて調子の悪い時はあるやろ」

「そやけど……って、あかん。トレーニングの時間やわ」

そう言って彼女は立ち上がってコートを掴んだ。が、ふと足を止めて

「ちなみに、どこに売っ払ってきたん？」

「骨董屋さんが並んでる通りの『一閑人』ってお店や。時々、そこに行つてコーヒー飲んでんねん。おいしゅうてな」

「十年前のオルゴールなんて、よう買い取ってくれたな。そういう店つて、カビが生えてるような物しか扱つてへんと思つてたわ」

「トレーニング頑張つてや。年が明けたら、全豪オープンやろ」

慌ただしく玄関へと向かう彼女に母親が「なっちゃん、もう帰らはるの？」と声をかけていた。「はい。お邪魔しました」と彼女のよく通る声がして、玄関の引き戸の音と遠ざかっていく慌ただしい足音が聞こえた。

「あいかわらずハキハキしてはるな、なっちゃんは」

茶碗をかたづけていると、母親が顔を出してそう声を掛けてきた。

「うん。夏紀は変わらへん。昔も今も」

彼女は時計に目を向けた。もうすぐ5時。そろそろお弟子さんが稽古に来る時間だ。彼女は立ち上がると、二階の稽古場へと向かった。

夜は随分と冷え込むようになった。そろそろヒーターを出さなければ風邪をひいてしまう、と思いつながら、僕は自分用のコーヒーを入れる為にお湯を沸かしていた。すると背後で微かな物音が聞こえた、ような気がした。

振り返つて見ると、テーブルの上に所在なげに置かれたあのオルゴールの上に、チュチュを着た小さなバレリーナが座っているのだ。座っているだけで踊ろうとしない。驚いて見ていると、彼女は顔を上げた。憂いを帯びた深い青い目で、じつとこちらを見つめている。何かを訴えているように。

「……何が言いたいだい？」

そう訊ねてみた。が、彼女はじっと見つめるばかりで口を開かない。やがて再びうつむいてしまうと、すっと姿を消してしまった。

おそらくはオルゴールの化身なのだろう。だが何故バレリーナなんだ？と首を捻っていると、お湯が沸騰する音が聞こえてきた。僕は慌てて、ガスを止めに戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5524t/>

「一閑人」奇談

2011年11月26日00時57分発行